

## 心臓手術後のC型肝炎

小池通夫 住山景一郎 小林昌和 奥田修司

要約：先天性心疾患に対する心手術のうち開心術に限って、C100-3抗体を測定した105例について検討した。抗体陽性は16例で、持続陽性が12例、一過性陽性が4例であった。GPT 100以上は20例で、この中でのHCV陽性は12例全て持続陽性例であった。持続陽性12例のうちスクリーニング開始前発症は10例、開始後は2例であった。12例の肝障害発見日（潜伏期）は、平均44日であった。経過としては、1峰性1例、2峰性1例、3峰性2例、多峰性8例であった。

見出し語：C型肝炎、C100-3抗体、心臓手術後、血液センタースクリーニング

### <対象>

1985年～1991年6月までの約6年間に、当院胸部外科で先天性心疾患患者220例に対して手術を行った。このうち人工心肺を使用した開心術が190例、使用しなかったのが30例であった。190例で死亡24例、経過を観察できなかった26例を除いた140例中、HCV-C100-3抗体を測定した105例について検討した。

### <結果>

年齢分布は、およそ3分の1が1歳以下で、3分の2が2歳以下であった。年齢別の、HCV陽性者に有意差はなかった。

C100-3抗体を測定した105例中抗体陽性は合

計16例で、持続陽性が12例、一過性陽性が4例であった。なおGPT100以上が105例中20例、このなかのHCV陽性は12例ですべて持続陽性例であった。20例のうちHCV陰性の8例は、2例がCMV感染と考えられたが6例は原因不明であった。（表1）

1989年11月から開始された血液センターC100抗体スクリーニングの前後にわけると、開始前の対象は54例、開始後は51例でほぼ等しい数になった。この中で抗体陽性は、開始前11例、開始後5例であった。前述の肝障害を伴う抗体持続陽性12例のうちで10例が開始前、開始後は2例であった。また、一過性の抗体陽性を示した4例のうち3例

はスクリーニング開始後の例で、これらは術後3カ月の初めての検査で抗体陽性であったが、その抗体価は低くいずれも1,2回陽性を示したのちGPT上昇もなく6カ月までに陰性化した。(表2)

表3は抗体陽性例の患者背景を示すが、No.1~11までがスクリーニング開始前、No.12~16が開始後の患者である。肝障害発見日(潜伏期)は、平均44日である。(226日まで検査が飛んでしまっていた症例13は省く)GPTのピーク値は、最低が107、最高が588で平均が326であった。肝生検は、4例に施行しさまざまな結果であった。IFNは肝生検でPHであった症例3だけに使用している。(表3)

年度別にみると、HCV抗体測定は当然のことながら最近になって増えてきている。この中で1986年に肝障害が多いのにC型肝炎がみられないのは、この5例は術後3~4年後に初めてHCV抗体を測ったものでそれ以前のことがわからないといったこともある。従って、私どもの例で術後肝炎のほとんどはC型肝炎であると考えている。

(図1)

図2は、抗体陽性肝障害例12例のGPTの経過を示す。6カ月あたりから正常化したと思われる例がみられるようになる。個々の例でみると、およそ1峰性1例、2峰性1例、3峰性2例、多峰性8例になる。多峰性8例のうち、GPTがその後正常化したのは3例、上下動が続いているのは5例である。(図2)

<まとめ>

開心手術例でHCV抗体を測定した105例中陽性は16例(15%)で、12例が持続陽性、4例が一過性陽性であった。一方、GPT 100以上に上昇

した例は20例で、持続陽性12例は全てこの中に入った。12例の内訳は、スクリーニング開始前の54例中で10例、開始後の51例中で2例であった。明らかに開始後の方が低いが、ここにみられた2例については保存血清について第二世代、HCV-RHAの検索を行う予定である。潜伏期間は平均44日で、30日までが約半数であった。GPT変動に関しては、多峰性を示すことが多く、このうち半数以上が現在でも上下動を継続している。一過性陽性4例についてはすべてGPT正常であった。

今後、スクリーニングにも第二世代が使われるようになるため、輸血後C型肝炎はほとんどなくなるであろうと思われる。

表1

	肝 障 害		合 計
	(+)	(-)	
HCV (+)	12	4	16
HCV (-)	8	81	89
合 計	20	85	105

表2

輸血用血液のHCV抗体スクリーニングの有無と開心術後肝機能

	スクリーニング前		スクリーニング後		合 計
	肝障害 (+)	肝障害 (-)	肝障害 (+)	肝障害 (-)	
HCV (+)	10	1	2	3	16
HCV (-)	7	36	1	45	89
合 計	17	37	3	48	105

☆スクリーニング：1989年11月から

表 3

開心術後 C100-3 抗体陽性例一患者背景

No	症例	生年月日	年齢	病名	肝障害発症 術後日数	最高GPT (U/l)	術後HCV 測定年月	肝生検 術後年月	IFN
1	S.M.	77.06.22	8Y	ASD	36	557	4:3	AVH (0:5)	
2	K.K.	85.02.12	9M	VSD	28	478	4:5	CIH (1:7)	
3	T.A.	80.06.11	7Y	VSD	36	252	2:9	CPH (3:6)	★
4	Y.N.	87.01.17	1Y	VSD	24	415	2:3		
5	M.M.	76.01.20	12Y	VSD	30	588	2:5	CAH (0:5)	
6	T.I.	80.12.10	7Y	ASD	84	108	2:0		
7	R.Y.	84.05.06	4Y	TOF	92	243	1:5		
8	K.M.	89.01.13	1M	TAPVC	43	359	1:3		
9	A.I.	86.10.15	2Y	TOF	なし	26	2:1		
10	R.M.	89.05.22	1M	ASD	19	314	1:2		
11	A.T.	83.09.21	5Y	VSD	24	274	0:7		
12	K.I.	75.01.14	15Y	TOF	なし	38	0:6		
13	E.N.	90.09.17	11D	CoA	226	111	0:7		
14	Y.I.	85.12.08	4Y	TOF	67	107	0:7		
15	N.W.	90.11.12	1M	TAPVC	なし	26	0:3		
16	T.S.	90.07.12	9M	ECD	なし	23	0:2		

図 1

年度別患者状況

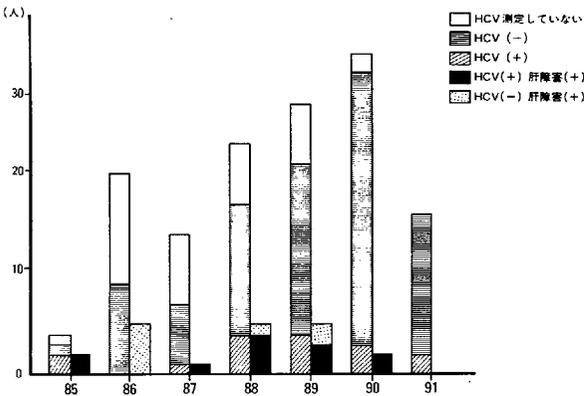
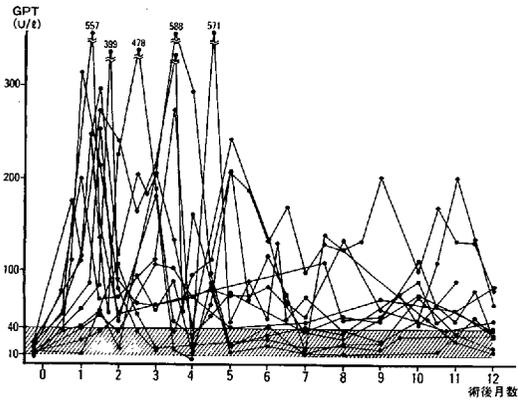


図 2

C100-3 抗体陽性、肝障害(+) 12 例の、術後月数とGPTの変動





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:先天性心疾患に対する心手術のうち開心術に限って、C100-3 抗体を測定した 105 例について検討した。抗体陽性は 16 例で、持続陽性が 12 例、一過性陽性が 4 例であった。GPT100 以上は 20 例でこの中での HCV 陽性は 12 例全て持続陽性例であった。持続陽性 12 例のうちスクリーニング開始前発症は 10 例、開始後は 2 例であった。12 例の肝障害発見日(潜伏期)は、平均 44 日であった。経過としては、1 峰性 1 例、2 峰性 1 例、3 峰性 2 例、多峰性 8 例であった。